

立命館大学グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」ニュースレター

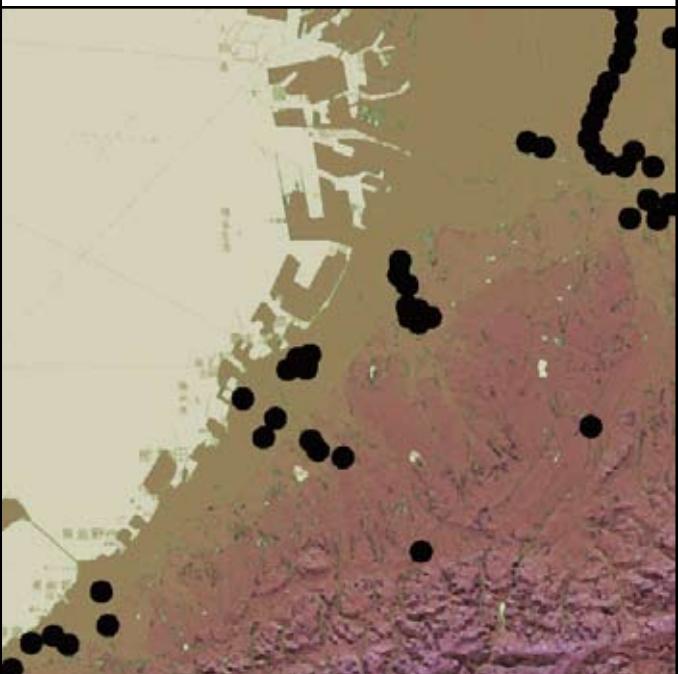
## Contents

川嶋 將生 2  
「発刊に寄せて」

木立 雅朗 3  
「実験考古学から見た京焼の技術」

李 基星 4  
「考古学での GIS の応用」

行事の記録 5



川嶋 將生 (拠点リーダー / 立命館大学大学院文学研究科・教授)

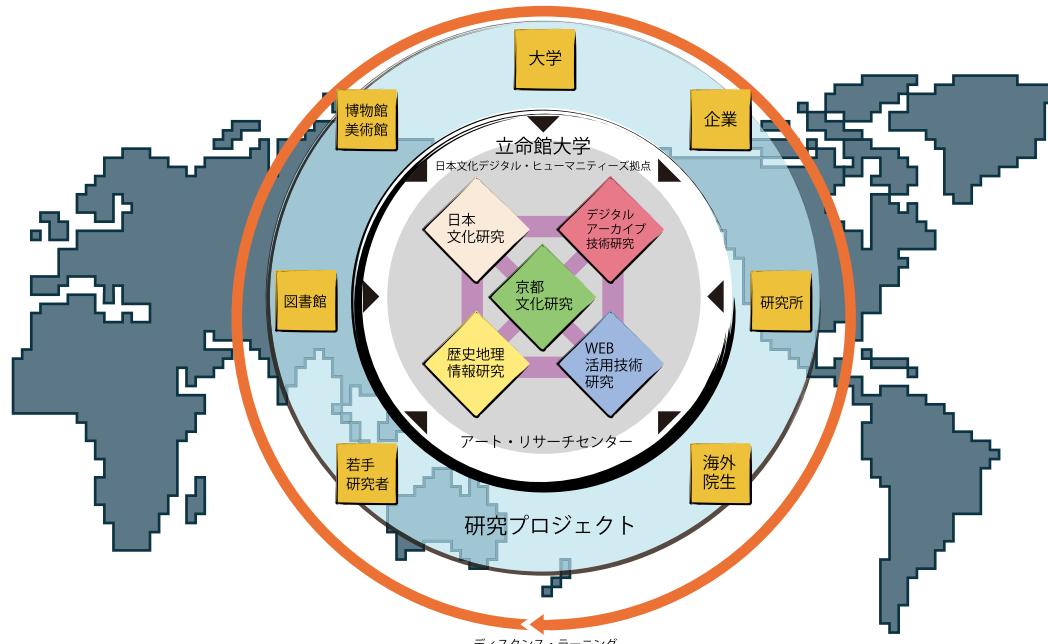
立命館大学グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」は、2002～06 年度に実施された 21 世紀 COE プログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」を受け継ぐ形で、2007 年 6 月に発足しました。

「京都アート・エンタテインメント創成研究」の成果は、マルチメディア型デジタルアーカイブなどの情報技術が人文科学の研究環境や手法を大きく飛躍させ得ること、そして、こうしたデジタルアーカイブが情報のみならず人的なポータルをも形成し、世界の日本研究機関のハブとなり得ることを証明しました。本拠点はその成果をさらに深化させるべく企図されたものです。

しかし、私たちが本拠点を立ち上げるきっかけとなったのは、単に先行プログラムの継続のためばかりではありません。現在、海外における日本文化研究は急速にネットワーク型の展開を強めていますが、日本における日本文化の研究者は、日本で日本文化を研究しているゆえにネットワークの外で孤立する傾向にあります。そのため、日本と海外の研究者の間で、研究方法や目的意識に大きな乖離が生じてきており、日本の日本文化研究者が世界における日本文化研究の進展を阻害する一因となってしまうかもしれない、という危機意識を私たちは抱いています。つまり、私たち日本文化研究者は、現在、日本というローカルを対象としつつもグローバルな環境の中に身を置き、国際的な場で海外の研究者と論じあう必要に迫られているわけです。そのために必要な研究の場、教育の場を、私たちは「デジタル・ヒューマニティーズ」をキーワードにして、創ろうとしているのです。

急速にグローバル化していく一方で、多様な姿を見せるこの世界の人間の営為に対して、従来の人文科学の方法を踏襲するだけでは、私たちの学問は無力なものとなってしまうことでしょう。そのために、私たちは、人文科学の研究対象に、情報科学の知見を取り入れることによって、しかも、その新しい形、「デジタル・ヒューマニティーズ」を見つけることを通して、これまでの人文科学の枠組みの殻を破り、さらには、十分な強度をもった学問として、人文科学の枠組みを再編したいと考えています。

新しく発刊するこのニュースレターは、そのような私たちの活動の一端をひろく知っていただくためのものです。私たちの試みがうまくいかどうか、ご覧いただくとともに、積極的なご意見をぜひともお寄せくださいますよう、お願い申し上げます。



# 実験考古学から見た京焼の技術

木立 雅朗 (立命館大学大学院文学研究科・教授 / 本拠点「京都文化研究班」)



京都では多くの伝統工芸が現在も健在であるため、文献史料・民俗事例・発掘調査成果の3者を直接対比できる例が多い。歴史学の主要方法論を駆使できる絶好のフィールドと言える。しかし、すでに廃れた技術も少なくないし、近世・近代の間に変化した「伝統」工芸も多い。以下は、尾形深省(乾山)の最初の窯、鳴滝乾山窯跡から出土した「金炭窯」をめぐる実験考古学の試みである。

## 鳴滝乾山窯跡から出土した「金炭窯」

京都市右京区鳴滝泉谷町に所在する鳴滝乾山窯跡の発掘調査は、法藏寺鳴滝乾山窯址発掘調査団によって2000年～2004年までの5年間行われた(2003年度から本学21世紀COE京都アートエンタテインメント創成研究が加わる)。多くの遺物が出土したが、そのなかの一部に特殊なものが含まれていた。『京都陶磁器説図』(明治6年)に「金炭窯」として紹介された低火度焼成(楽焼・上絵付)の窯の破片である。この窯は昭和初期までは使用されていたが、電気窯の普及によって急速に廃れた。窯は二重構造で、内側の窯のなかに製品を詰め、外側の窯と内側の窯の隙間に備長炭を詰め込んで焼成する。『陶磁器説図』では大型の窯も小型の窯も4時間で焼き上ると説明され、にわかに信じられないが、すでに廃れた窯であるため、聞き取り調査によって技術を復原することが困難である。また、出土品を観察すると、炭火が直接触れる部分が白色化していること、内側の窯は白色粘土でヒビ割れを補修しているが外側には補修が確認できること、内側の窯の内面に釉薬を塗布していることなど、理由のわからない現象が多かった。そのため、出土遺物と史料から「金炭窯」を復原し、その焼成実験を行った。

## 「金炭窯」の復原と焼成実験

焼成方法を変えながら4回の実験を行った結果、確かに4時間余りで800度を越えた例もあった。窯は出土品と同じように粘土紐を巻き上げて製作したが、焼成によって粘土紐の接合部分が剥離しやすく、1回の焼成でかなりの剥離とそれに伴うヒビ割れが生じた。外側の窯は内外の温度差が大きいためヒビ割れや剥離を防ぐことは不可能だが、針金で縛ってあるため補修の必要がない。内側の窯は外側の窯に比べると焼成による割れは少ないが、焼成回数を重ねるとヒビ割れが進行し、粘土で補修をする必要があった。当初は還元雰囲気の侵入を防ぐため、ヒビ割れの厳密な補修が必要だと想定していたが、製品にまで還元雰

囲気の影響が現れることはなかった。その上、窯のヒビ割れは、焼成時の窯の伸縮による歪みを抑える「遊び」として必要なものであることも判明した。出土遺物の不可解な点はこうした実験によって大半が明らかになった。

## 「金炭窯」の技術系譜

江戸時代からはじまった京焼は、瀬戸・美濃の技術を基礎にして発展した。しかし、「金炭窯」は瀬戸・美濃にはなかったものであり、中国南部の華南三彩の系譜をひくと言われている楽焼や押小路焼につながる。また、「金炭窯」は景德鎮でも確認され、中国陶磁器の色絵との関連も想定される。この窯に限らず、京焼の技術は内外各地の技術を導入し、組み合わせることで成立している。技術的な独自性は乏しいが、それゆえに各地との関連性が重要な研究課題になる。技術からの検討は考古学を中心とした様々な方法論を必要とする。こうした研究は美術史・文化史を中心にして進められてきた京焼研究に新しい視点を提供するだろう。

(きだち・まさあき 日本考古学)



1. 復原した「金炭窯」の焼成実験



2. ヒビ割れが進んだ外側の窯（実験後）

# 考古学での GIS の応用



李 基星（本拠点 PD/「日本文化研究班」）

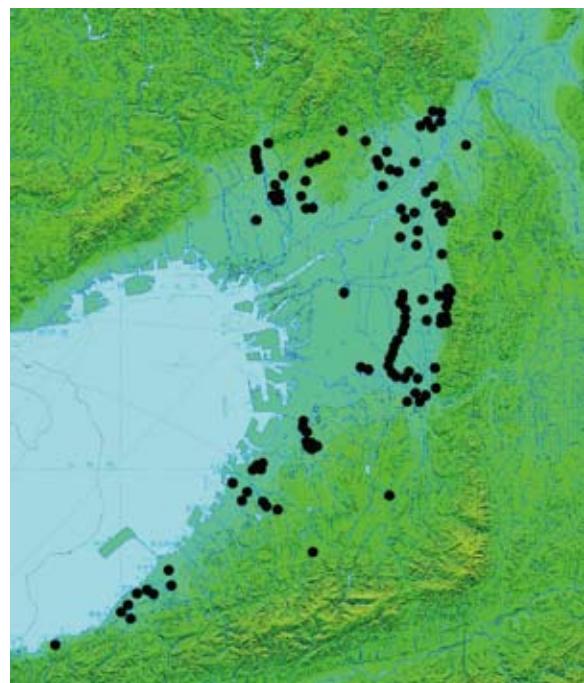
人文科学である考古学で本格的に科学的分析技法が応用されるようになったのは 1960 年代の欧米からである。1960 年代アメリカから始まった過程考古学 (Process Archaeology) は過去の記述ではなく、過去を説明しようとする動きである。そのため、考古学において物質文化を解釈する際に、より客観的かつ科学的方法を求めた。その科学的方法論として用いられたのが統計学や地理学の空間分析などである。特に、従来の単なる遺跡を地図に表示し、それを持って分布圏や文化圏を把握する方法に反対し、地理学の空間分析の概念が応用されるようになった。その空間分析を用いた最初の結果がイアン・ホダー (Ian Hodder) とクライヴ・オートン (Clive Orton) の『Spatial Analysis in Archaeology( 考古学における空間分析 )』 (1976) である。その中、ホダーは新たな空間分析方法の必要性を ①( 単純な分布図の作成のような ) 既存の分析はその不明確な目的や方法により限界があり、細部分析に役に立たない。② 分布に対する主観的判断は危険性がある。③ 多量の資料を操作するためには異なる方法が必要と述べている。そのような必要性から空間分析は考古学で基本的分析方法の一つとなり、とりわけ 1980 年代以後 GIS の発展や資料の蓄積とともに活発な研究が欧米を中心に行われてきている。

GIS を応用した空間分析は多様な方面からの研究があるが、① 遺跡分布の予測 (Predictive Archaeological Modeling) ② 遺物や遺跡の分布パターン分析 (Point pattern analysis) ③ 集落考古学 (Settlement Archaeology) の三つの分野が取り上げられる。① はすでに確認されている遺跡の立地の属性、河川からの距離、方向、傾斜度などを分析し、どのような地域に遺跡が立地する確率が高いのかを予測することである。② は一つの遺跡内での遺物の分布やある地域での遺跡の分布パ

ターン ( 無作為・規則的・密集など ) からその意味を導出する。③ は三つの段階に分けられる。一つ目は集落内の構造を明らかにする。二つ目は集落と周辺の自然環境との関係である。それは景観考古学 (Landscape Archaeology) とも呼ばれ、さらにここでは一つの集落が使える資源の分布範囲を把握する分析 (Site catchments Analysis) も含まれる。三つ目は集落と集落との影響関係の分析で、その影響関係から当時の社会の様相を明らかにできると思われる。

しかし、GIS の応用が考古学の空間分析ですべてを解決することではない。むしろ、その副作用、方法上の誤謬や過度な分析の濫用に注意すべきであろう。筆者の現在の研究テーマは GIS の空間分析を応用し、大阪平野における弥生時代の集落と水田などの分布パターンやその領域を推定することで、その研究から弥生時代の社会の一面を明らかにできると思う。

(い・きそん 日本考古学)



大阪平野の弥生時代前期の遺跡



# 行事の記録



## イベント（主催・共催）の記録

- [講演]「身体との「対話」、身体を通した「対話」～コンテンポラリー・ダンス」 講師：坂本公成氏 2007年7月7日 立命館大学アート・リサーチセンター
- [講演]「映像文化の一潮流－もう一つの、極小かつ膨大な映像史－」 講師：松本夏樹氏・小崎泰嗣氏 2007年7月11日 立命館大学アート・リサーチセンター
- [シンポジウム]「映画復元の現在－デジタル復元と真正性－」 2007年10月1日 立命館大学衣笠キャンパス・以学館2号
- [展覧会]「ポール・ビニー展 日本版画の伝統と継承－西洋からのまなざし－」 2007年11月5日～11月30日 立命館大学アート・リサーチセンター
- [講演会]「ポール・ビニーが語る日本版画の伝統と継承」「歓榮堂による彫りと摺りの実演」 2007年11月10日 立命館大学アート・リサーチセンター
- [ワークショップ]「MPR2007」 2007年11月16・17日 立命館大学びわこ・くさつキャンパス
- [シンポジウム]「デジタル・ヒューマニティーズの可能性－Web コミュニティーが拓く世界、新たな人文学への挑戦－」 2007年12月18日 立命館大学東京キャンパス
- [シンポジウム]「モーションキャプチャ技術と身体動作処理」 2007年12月21日 立命館大学衣笠キャンパス・創思館
- [研究会]「洛中洛外図屏風の総合的アーカイブと都市風俗の変遷」プロジェクト研究会 2007年12月26・27日 立命館大学アート・リサーチセンター

## GCOEセミナーの記録

会場：【衣笠】立命館大学アート・リサーチセンター 【BKC】立命館大学情報理工学部メディア情報学科会議室他

- 第1回 10月2日（火）  
川嶋将生「挨拶に代えて 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点の全体像について」  
八村広三郎「デジタル・ヒューマニティーズとは何か」  
赤間亮「日本文化研究のグローバル化とデジタル・ヒューマニティーズ」
- 第2回 10月9日（火）  
千羨幸「新石器時代から無文土器時代への住居様相の変化」  
井上学「モバイル GIS（POSシステム）による文化財フィールド調査」
- 第3回 10月16日（火）  
花田卓司「南北朝期の軍事関係文書からみた京都」  
石上阿希「西沢一風の春本と淨瑠璃との関連性－『好色極秘伝』について－」  
■エキストラ版 第1回ランチタイム・セミナー  
塩出徳成「GIS環境を利用した三次元時空間都市モデルの開発」
- 第4回 10月23日（火）  
上田学「映画常設館の出現と都市の変容」  
鶴田清也「バーチャルダンスコラボレーションシステムのためのリアルタイム動作認識」
- 第5回 10月30日（火）  
Sanjay Rana「200年前のロンドン蒸気サーカスの場所を巡る研究－学際的アプローチ－」
- 第6回 11月6日（火）  
楠井清文「1940年代朝鮮の日本語小説研究－雑誌『国民文学』の分析を中心に－」  
李基星「近畿地方における水田稻作農耕開始期の様相」
- 第7回 11月13日（火）  
戸所泰子「都市景観形成に資する京町家の色彩－景観DBの構築に向けて」  
金子貴昭「版本資料のデジタルアーカイブ－意義と課題－」
- 第8回 11月20日（火）  
松葉涼子「浮世絵にみる歌舞伎演出の絵画的表現－「画題」との関連に着目して－」  
大矢敦子「明治大正期の日本映画界を取り巻く環境－尾上松之助を通して－」
- 第9回 11月27日（火）  
John O'Brian「20世紀美術におけるカナダと日本の風景画の立場」
- 第10回 12月4日（火）  
永井一彰「板木（はんぎ）は語る」
- 第11回 12月11日（火）  
桐村喬「地図情報のカタログサイトの開発－Web上の地図カタログ－」  
八村広三郎「デジタル・ヒューマニティーズ関連の学会等について」
- 第12回 12月18日（火）  
松本郁代「海外における日本研究（文系）の意義と課題」

イベント、GCOEセミナーの最新情報は下記のサイトをご覧ください。

立命館大学・日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 HP [http://www.ritsumei.jp/humanities/index\\_j.html](http://www.ritsumei.jp/humanities/index_j.html)

立命館大学アート・リサーチセンター HP <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/>

GCOEセミナー・告知ブログ <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/seminar/>



文部科学省グローバル COE プログラム  
「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」  
News Letter 第 1 号  
2008 年 1 月 31 日発行

立命館大学アート・リサーチセンター  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
TEL:075-466-3411  
FAX:075-466-3415  
<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/>

お問い合わせ  
立命館大学研究部人文社会リサーチオフィス GCOE 事務局  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
TEL:075-465-8224  
FAX:075-465-8245  
E-mail:[jdh-jimu@st.ritsumei.ac.jp](mailto:jdh-jimu@st.ritsumei.ac.jp)

